今号の主な記事

2面　アジア太平洋海事大学（MAAP）校長が海員組合本部を表敬訪問

3面　新造船・沖合底引き網漁船就航〈北陸〉

船員しんぶん

◆ホームページアドレス https://www.jsu.or.jp ◆Eメールアドレス kaiin@jsu.or.jp

全日本海員組合発行 第3119号（昭和25年8月24日第三種郵便物認可）

2026年（令和8年）6月5日

本紙は毎月5・15・25日発行

〒106-0032 東京都港区六本木7丁目15番26号
全日本海員組合本部
発行人　齋藤　洋
TEL 03-5410-8329
FAX 03-6910-5339

定価1部50円
（組合員の購読料は組合費に含む）

静岡県焼津市

漁師の仕事！船と漁業を知る授業

漁船員の仕事を学ぶ

5月31日、一般社団法人全国漁業就業者確保育成センターが主催し、全日本海員組合が後援する「漁師の仕事！船と漁業を知る授業」が、遠洋漁業の基地として知られる静岡県焼津市で開催された。この漁業就業ガイダンスは、実際に漁船を見てから就職ガイダンスに臨むという企画で、静岡県立焼津水産高等学校をはじめ、北海道、岩手県、山形県、千葉県、東京都、愛知県、富山県、島根県、沖縄県の各水産・海洋系の高等学校から約100人、県内外の小・中学校から約40人と生徒の保護者、漁業関係者など総勢260人が参加した。

海外まき網漁船

全国漁業就業者確保育成センターの取り組み

一般社団法人全国漁業就業者確保育成センターは、水産庁や一般社団法人大日本水産会、全国漁業協同組合連合会の協力の下、漁業への新規就業者を発掘するため、就労に関する情報提供や全国各地域・各漁業協同組合などと連携し、新たな漁業の担い手を確保・育成することを目的として、漁業就業支援に取り組んでいる。

水産高校交流会

「漁師の仕事！船と漁業を知る授業」の前日、5月30日18時から、水産高校交流会が開催され、漁業就業ガイダンスに参加する生徒や企業が参加し、交流・懇親を深めた。一般社団法人全国漁業就業者確保支援センターの馬上敦子事務局長が司会を担当し、静岡県立焼津水産高等学校の栗山朝充教諭のあいさつで交流会がスタートした。

その後、参加した各学校・各企業から紹介を兼ねたあいさつをした後、持ち寄ったご当地土産を交換するなどして交流を深めた。

漁師の仕事！船と漁業を知る授業

5月31日の午前9時から「漁師の仕事！船と漁業を知る授業」が開催された。開会式は、静岡県立焼津水産高等学校の沼里智彦校長のあいさつに続き、焼津まぐろ漁業株式会社の立林雄祐常務取締役から、船内では頭上や足元に気を付けることや、船内の機器に触れないよう安全指導などが行われた。その後、記念撮影を行い、高校生グループと中学生グループに分かれ、漁業について学んだ。

午前の部　船内見学会

午前の部は、焼津港に入港中の株式会社いちまる所属海外まき網漁船「第十八松友丸」と福龍漁業株式会社所属遠洋マグロはえ縄漁船「第二十一福龍丸」、静岡県立焼津水産高等学校の実習船「やいづ」の船内を見学した。

船内見学では、乗組員や関係者が船橋や機関室、居住区を案内し、生徒たちから船内での生活や操業などについての質問があり、担当者が丁寧に説明を行った。また、海外まき網漁船の見学では、普段入ることのできないヘリポートに上り、興奮を隠しきれないようすも見られた。

実習船・やいづ

午後の部　漁業ガイダンス

午後の部は、焼津市総合福祉会館（ウェルシップやいづ）に移動し、漁業ガイダンスが行われ、13の漁業会社が参加した。

中野弘道焼津市長から「日本の水産業の未来をつないでいく大切な授業を通じ、未来を見る力を付けてほしい」とあいさつが述べられた後、髙橋健二中央執行委員が「各企業から説明を受け、気になることはしっかり質問をしてほしい。今日は、船の仕事、漁船員の仕事をしっかり学んでほしい」とあいさつし、漁業ガイダンスがスタートした。

参加した高校生は、各企業のブースを回り、漁法や船種などについて、自身の将来のために真剣なまなざしで説明を受けた。

一方、中学生グループは保護者と一緒に「漁師の仕事！はじめてセミナー・水産高校と焼津を知る授業」に参加し、焼津市や参加企業から漁業の説明、各水産高等学校から各学校の説明や進路相談などを受け、漁業や漁師について理解を深めた。

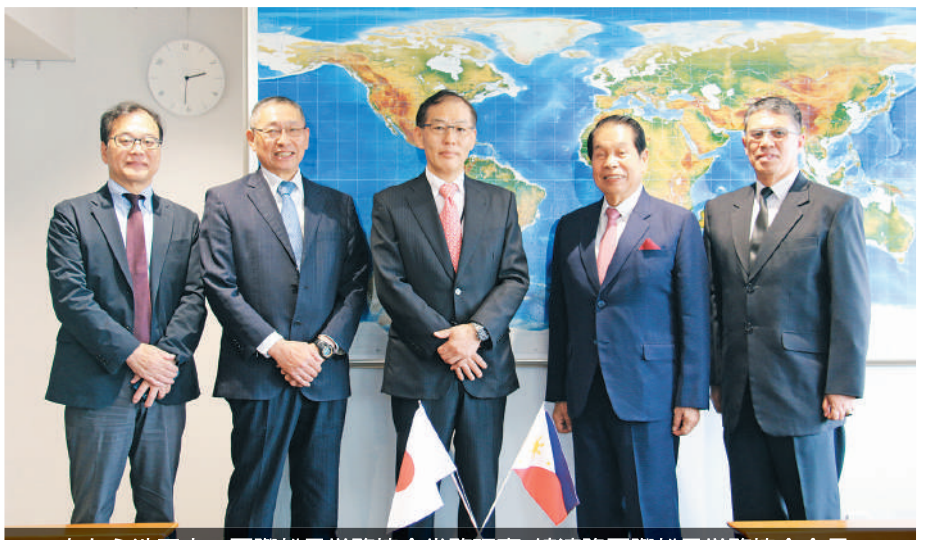
閉会式では、参加した高校生から「今日の体験を、将来の進路に活かしたい」「将来のことをしっかり考えられる、いい経験だった」などの感想が述べられた。また、中学生からは「実際に船内を見学して、目で学ぶことができてよかった。将来は水産高等学校に進学したい」と感想が述べられた。

最後に一般社団法人全国漁業就業者確保育成センターの小坂智規代表理事会長から「今日の授業で学んだことを生かし、漁業の世界に飛び込んで来てほしい」と閉会のあいさつが述べられ、終了した。

アジア太平洋海事大学 Maritime Academy of Asia and the Pacific（MAAP）エドゥアルド・サントス校長が 海員組合本部を表敬訪問

ロビーの楢崎猪太郎（初代組合長）銅像の前で説明する田中伸一組合長代行

海員組合展示室で資料を説明


左から池田良一国際船員労務協会常務理事、綾清隆国際船員労務協会会長、田中伸一組合長代行、エドゥアルド・サントス校長、ゲルロ・エルチコ学生主任

全日本海員組合の運動の歴史を説明

5月26日、アジア太平洋海事大学（MAAP）のエドゥアルド・サントス校長とゲルロ・エルチコ学生主任が本組合を表敬訪問し、国際船員労務協会の綾清隆会長、池田良一常務理事、寺西尚平マニラ駐在の同席の下、田中伸一組合長代行、齋藤洋総務局長との懇談を行った。

懇談においては、はじめに齋藤総務局長から、組合本部会館の改修の経緯や計画に関する概要について説明した後、紹介動画を視聴していただいた。

続いて実際に本部会館の各フロアを見学し、設計の特殊性や海事思想の普及に資するべく一般開放エリアに込めた期待など、詳細な説明により共通理解を図った。

見学を終えたエドゥアルド・サントス校長は「かつて訪れた組合本部会館との違いに驚いた。全面的な改修を終えて、まだ間もないこのタイミングで訪問できたことに感謝したい。また、一般に向け海運や船員職業、そしてJSUについて啓蒙する施設・設備についても素晴らしいと思った。この組合本部会館が、若い人が船員職業を志す一つのきっかけとなれば喜ばしく思う」と感想を述べた。

田中伸一組合長代行からは「この度の訪問に感謝する。全日本海員組合の100年の歴史のうち、約40年はフィリピンと手を携えて活動してきた。今後もこれまで築いた強固な連帯をさらに発展させ、共により良い船員社会の構築を目指していきたい」と表敬訪問への謝意を示した。

MAAPは1998年に、フィリピン船舶職員部員組合により設立された4年制の商船大学で、2009年には本組合と国際船員労務協会により日本商船隊に乗り組む士官候補生養成のためのキャンパス（JSU-IMMAJキャンパス）を設置している。

毎年200～250人程度の船員を輩出するMAAPは、日本の外航海運において重要な役割を果たしている。また、MAAPと日本の商船系高等専門学校の学生は、MAAPの航海実習船Kapitan Gregorio Oca号を軸に、国際船員労務協会主催「日比商船学生異文化交流プログラム」を通じての交流・交友を重ねてきている。《国際局＝発信》

沖縄支部

沖縄県議会と沖縄県教育委員会へ 海運・船員の政策諸課題に関する申し入れ

沖縄県教育委員会

左から崎山嗣幸政治参与、二神健太沖縄支部長、崎間恒哉教育指導統括監、大城潤一琉球海運職場委員、仲村未央沖縄県議会議員

沖縄県議会

左から崎山嗣幸政治参与、大城潤一琉球海運職場委員、中川京貴沖縄県議会議長、二神健太沖縄支部長、仲村未央沖縄県議会議員

5月19日、沖縄支部は海員・船員の政策諸課題に関する申し入れを沖縄県議会および沖縄県教育委員会に実施した。

申し入れには、二神健太沖縄支部長、大城潤一琉球海運株式会社職場委員と組合政治参与の仲村未央沖縄県議会議員、崎山嗣幸前県議会議員に同行していただいた。

申し入れ文書の内容は沖縄県立沖縄水産高等学校専攻科の定員拡大、船員後継者の確保・育成、タグボート基地の確保、海事思想の啓蒙活動などで、二神沖縄支部長が内容を詳細に説明した。

沖縄県議会

中川京貴沖縄県議会議長から「沖縄県にとって海運業および水産業は県民の生活物資や観光などを支える重要な職業であると認識している。後継者の確保・育成や沖縄県立沖縄水産高等学校の定員拡充、沖縄県立宮古総合実業高等学校の寮問題、タグボートの定係地問題など、要望にできる限り応えられるよう検討していきたい」との回答が述べられた。

沖縄県教育委員会

崎間恒哉教育指導統括監から「沖縄県立沖縄水産高等学校と沖縄県立宮古総合実業高等学校の果たしている役割は、海運業界にとって非常に重要であることは理解している。小中学生を対象とした海運業・水産業の啓蒙活動などを通じ、官・学・民が一体となって、後継者確保に向け取り組んでいかなければならない。また、沖縄県立宮古総合実業高等学校の寮に関する問題については、県だけでは対応できない部分もあるため、国にも要請を行いながら検討していきたい」との回答が述べられた。

沖縄県は、多くの離島航路を有しており、フェリー・旅客船の維持・存続、離島航路における船員の確保が喫緊の課題となっている。申し入れでは、理解を得られたものの、沖縄支部は今後も組合政治参与と連携を密にし、活動方針の具現化と海運・船員政策に向け取り組んでいく。

沖縄県の離島航路を維持するため 船員不足の克服が優先課題

三国港　沖合底引き網漁船

新造船

第一田井丸が就航

4月25日、沖合底引き網漁船の新造船・第一田井丸（総トン数19トン）が、大漁旗をなびかせ乗組員の家族や関係者が集まるなか、三国港（石川県坂井市）へ入港し、お披露目された。

有限会社藤島漁業の第一田井丸は、第五十八田井丸の代替船として、石川県七尾市の有限会社鳥毛造船所で建造され、三国港機船底曳網漁業協同組合の所属船の中では、令和元年に建造された栄吉丸以来、6年ぶりの新造船。

有限会社藤島漁業の代表取締役を務める漁労長の藤島正登さんは「漁船員の後継者確保が難しく厳しい状況だが、三国港の底引き網漁船を盛り上げたいとする思いから建造にこぎ着けた」と語る。

また藤島漁労長は、「米国とイランの武力衝突からの中東情勢の緊迫化により、燃料油価格の高騰や漁業資材なども上昇し、最新のエンジンや漁労機器を備えた新造船は、建造費用もさることながら、船を維持していくことが大変である。しかし、何よりも事故が無く、安全操業を第一とし、乗組員や関係者の皆さんの期待に応えられるように精一杯頑張りたい」と、お披露目に集まった人たちに意気込みを語った。就航にあたり三国船員会からも乗組員の安全と大漁の願いを込め大漁旗が寄贈された。

本船は漁具の積み替えなど、準備を終え5月6日に出漁し、甘えびをはじめとする魚介類を狙い操業している。

《北陸支部＝発信》

アカイカ漁に期待を寄せて

石川県・小木港から北太平洋に向けて

イカ釣り漁船が出港

晴天に恵まれた5月10日、石川県漁業協同組合小木支所所属の中型イカ釣り漁船が、家族や知人、漁業実習生の仲間の見送りを受け、北太平洋東沖のアカイカ（ムラサキイカ）漁に向け、小木港（石川県鳳珠郡能登町）から出港した。

近年まで盛んだった日本海のスルメイカ漁は、海水温の上昇や海況変化の影響で不漁が続き、事業の継続が難しく廃業する会社も続出した。

アカイカの漁場は、日本近海と違い、漁場までも10日ほどかかるが、日本海のスルメイカ漁に比べて漁獲量が安定していることから、日本海で操業していた漁船も活路を見いだすべく、アカイカ漁へ切り替えて、北太平洋の漁場へ向かう。

ただし、不透明な中東情勢と燃料油価格の高騰が不安材料に拍車をかける状況となっている現在、今後の水揚げに不安を残すことも懸念されている。

小木港からは、第二十三輪島丸と第二十八宝来丸、第八十六永宝丸、第三十一永宝丸、第八十八興洋丸、第五十八金剛丸の7隻が出港した。各船の漁労長は、水揚げも重要だが乗組員の健康と安全が第一であり、事故の無いように頑張りたいと抱負を語った。見送りの人たちは安全航海と大漁満足を祈って見送った。

《北陸支部＝発信》

2026年6月5日

中央選挙委員会　議長　齋藤　洋

第40期全国委員の当選告示

一、2026年5月25日付で告示した第40期全国委員補充選挙については、立候補の受け付けを締め切り、立候補者の資格審査を行い、候補者が適格であることを確認した。

対立候補者がない立候補状況であることから、全国委員選挙規則第25条D項により投票を略し、当選人を次の通りとする。

《企業区・企業単位》

112　長崎地区組合員　（補充定員1名・立候補者1名）

当選人　山本　一喜　山田水産　甲板員

第40期全国委員の資格喪失告示

一、次の者は、規約第47条A項6号により、全国委員資格を喪失したので告示する。

《地方区・地方単位》

04　関西　宮本　祐介

二、次の者は、規約第47条A項8号により、全国委員資格を喪失したので告示する。

《企業区・企業単位》

104　ニッスイマリン工業　星野　昭藏

第41期全国委員選挙候補者の登録抹消告示

一、次の者は、全国委員選挙規則第12条C項2号により、候補者の登録を抹消したので告示する。

《地方区・地方単位》

04　関西　宮本　祐介

《企業区・企業単位》

104　ニッスイマリン工業　星野　昭藏

以　上

今年も大いに盛り上がる

第43回横浜港カッターレース

横浜の初夏の風物詩 歴史あるカッターレース

予選レースを１位でゴールした海員組合Ｂチーム

５月24日、横浜市の山下公園前の海上で、第43回横浜港カッターレースが開催され、一般の部に海員組合の本部・関東地方支部の混合チームが参戦した。この「横浜港カッターレース」は、海洋海事思想の普及と国際港都ヨコハマとして、市民に親しみを深めてもらい、さらには港周辺の活性化を目的として実施しており、横浜市が帆船「日本丸」の保存展示場所に決定したことを記念し、１９８５年（昭和60年）に第１回目が開催された。長い歴史と実績をもつ横浜港のカッターレースは、この季節の横浜市の風物詩となっている。

横浜港カッターレースは、８人１チームで６メートル型カッター（公益財団法人帆船日本丸記念財団所有のカッター７隻と、横浜海洋少年団所有のカッター１隻）を使用し、氷川丸前を折り返す往復３６０メートルのタイムを競う。

この日は、一般レースに１１０チーム、女子レースに17チーム、小学生特別レースに５チームと、多くのチームが日本全国から参加し、しのぎを削った。

クルーが力を合わせてオールをこぐと、カッターボートが海面を疾走していく。各チームの応援に駆け付けた家族や友人のほか、山下公園を訪れた観光客も足を止め、海上を駆け抜けるカッターボートに、熱く大きな声援を送り、会場は大いに盛り上がった。

一般レースの予選は全35レースが行われ、本組合からは２艇が出場した。まずは、海員組合Ｂチームが第26レースに出場し、２分53秒65で見事１位となったが、タイム順により惜しくも予選敗退となった。海員組合Ａチームは、第30レースに出場し、３分25秒85の２位で予選敗退した。

決勝は予選タイム上位４チームが熱闘を繰り広げた結果、２分28秒34のタイムをたき出した『Ｔ・Ｉ・Ｔ　ＣＵＴＴＥＲ　ＣＬＵＢ』チームが四連覇を達成した。女子レースは、２分47秒22の好タイムで『ＭＹ　ＭＯＴＨＥＲＳ　ＬＡＤＩＥＳ』チームが三連覇し、小学生特別レースは４分７秒68で『ふじくもジュニア』チームが優勝した。

最後に表彰式が行われ、優勝チームに優勝カップが手渡され、第43回横浜港カッターレースは終了した。

第53回 神戸まつり

海上輸送の重要性をアピール

雲ひとつない快晴に恵まれた５月17日、神戸市民祭協会主催の「第53回神戸まつり」が開催され、海員組合関西地方支部もパレードに参加して海上輸送の重要性をアピールした。

今年のテーマ「広がる笑顔、神戸から！」のもと、会場には多彩なステージイベントや出店が並び、オープニングは神戸観光親善大使の５人が登壇し、金色のテープが打ち上がり、まつりの幕が開いた。

まつりのメインイベントである恒例の「おまつりパレード」は、今年は出発地点がフラワーロードから京町筋へと変わり、旧居留地エリア一帯がコースになり、69団体の５４００人が音楽隊やサンバ、ダンスなど見ごたえのあるパレードを演出した。おまつりに魅入った約70万７６００人の観衆からは、大きな歓声が沸き上がり、大いに盛り上がった。

パレードで関西地方支部は、昨年同様「うみ・みなとの仲間たち」の一員として参加し、海洋少年団など海事関係者含めて約１００人が隊列を組み「海にひらこうわれらの未来」の横断幕を掲げ行進し、船員や海事産業の重要性を広報した。

船をイメージした装飾車両の上では白い制服を身に着けた山﨑諒ケイラインローローバルクシップマネージメント株式会社職場委員が、沿道の観衆へにこやかな笑顔で手を振り、観衆から大きな声援が送られた。

また、行進中には「日本の暮らしは海上輸送によって支えられていること」や「神戸港が貿易港として発展し、街の文化や経済に大きな役割を果たしてきたこと」などが、アナウンスで紹介され、観客に向け海運と港湾の役割をわかりやすく伝え、海に囲まれた日本における船員・海員の重要性を広く発信した。

《関西地方支部＝発信》